

# 文化財こうち

第9号

令和5年3月31日  
高知県文化生活スポーツ部  
歴史文化財課



高知県内の新たな国登録有形文化財(建造物)として、令和4年10月31日に「足摺海底館」が、令和5年2月27日に「旧陸軍歩兵第四四連隊弾薬庫」「旧陸軍歩兵第四四連隊講堂」「高知追手前高等学校本館」が登録されました。また、国の重要文化財である「山中家住宅」は、令和4年5月に建造物保存修理事業を完了し、修復された姿で公開されています。

写真 左上「足摺海底館」 右上「山中家住宅」 下「高知追手前高等学校本館」

- |  |  |
|--|--|
| 1. 土佐清水市の文化財－足摺海底館とその歴史景観－ … 2         | 9. 東浜土居遺跡－弥生時代の集落跡を確認－ ……10  |
| 2. 旧陸軍歩兵第44連隊跡地に残る弾薬庫と講堂 … 3           | 10. 長宗我部一族の寺跡発掘調査<br>－長宗我部氏の菩提寺瑞応寺を求めて－ ……11                       |
| 3. 重要文化財(建造物)<br>土佐神社・朝倉神社の保存修理工事 …… 4 | 11. 神峯寺・神峯神社の文化財調査 …… 12   |
| 4. 高知城西ノ丸西側石垣の復旧工事について …… 5            | 12. 中土佐町の景観－海・町・山の生活－ …… 13  |
| 5. 国指定重要文化財<br>「山中家住宅」の保存修理工事について …… 6 | 13. コロナ禍における地方寺院の取り組み<br>－四国霊場第三十八番札所<br>蹉跎山(足摺山) 補陀陀院 金剛福寺－ …… 14 |
| 6. 北寺所蔵仏像群の免震装置設置事業について …… 7           | 14. 佐川町の文化財－名教館と牧野富太郎－ …… 15                                       |
| 7. 佐川町の文化財「斗賀野花取り踊り」(白倉神社花取踊) … 8      | 15. 裏表紙 掲載一覧表 …… 16  |
| 8. 八代青年奉納歌舞伎<br>－いの町枝川地区に残る伝統文化－ …… 9  |  |

# 1. 土佐清水市の文化財

## －足摺海底館とその歴史景観－

### 登録有形文化財となった「足摺海底館」

足摺海底館は、足摺宇和海国立公園の一角である土佐清水市竜串に位置する海上・海中展望塔です。昭和47年(1972)1月1日に開業し、昭和50年(1975)1月3日に入館者100万人を数え、開業50周年を迎えた令和4年1月1日までに約640万人の方々にお越しにいただいている土佐清水市を代表する観光施設です。

### 「建造物の特徴」

海中展望塔は1969年から1980年にかけての約10年間で6基建造されており、足摺海底館は国内で4番目の事例となります。先行3例とは異なる特徴を模索した結果、鉄骨造4層、全高24.3m(うち海下7m)の円筒型胴身で、海上展望室は四方に約6m跳ね出す十字形プランで企図されました。外装はFRPパネルにより覆われ、海上展望塔部を赤に、胴身を白に塗装し、頂部側面は周辺砂岩に近い色彩のブロック型パネルが取り付けられています。

頂部上面にはクレーン揚重用の吊穴鋼板が残り、最頂部は給排気ガラリとなっています。

海中底部分は景観の保護を目的に基礎はアンカー2段式が採用され、円形フレームが海底に固定されています。

また、波の影響を受ける胴体部は、円形フレームを垂直部材でつなぎ、これを厚さ14mmの鋼板が覆っています。鋼板とFRPパネルの隙間にはモルタルを圧入してパネル破損及び侵入を防止しており、総重量は520tにもおよびます。

海上展望室は、跳ね出しの正面が遠望できるガラス面となっており、側面の円形窓からは赤く緩やかな曲線を持つ海上展望室外観を間近に望めます。海上展望室から海中展望室までの高低差は約14mで、二重らせん階段で昇降導線を分けています。底部円形平面の海中展望室には直径60cmの円形窓が上下千鳥に16枚設けられ、海中の様子を全方位覗き見ることができます。

展望塔本体と海岸をつなぐ連絡橋は、幅1.85m、全長約60mの鉄骨造で3本の柱脚が海底に固定されています。展望塔本体にあわせて、橋桁が赤、手摺と柱脚が白に塗装されています。技術的にも波力の算定

は当時の最新の評価式を用い、FRPやPSアンカーを海中構造に初めて採用するなどの挑戦的な試みが見られ、同時代の思想や最先端技術が一举に体现するような場が土佐清水市竜串地域に現れたことを証左する建造物です。



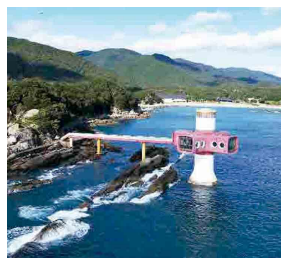
建設当時の足摺海底館



海中展望室内観

### 「竜串地域と足摺海底館」

この1960年代から1970年代の未来感を造形したような姿の足摺海底館は長く土佐清水市観光の観光シンボルとして竜串地域のみならず土佐清水市民にも愛されてきました。地元小学校では、環境学習の場としての利用や、各種の行事で描かれるなど、教育面での活用も図られています。



現在の足摺海底館



地元の小学校の入学式

株式会社高知県観光開発公社 土居 敬

## 2. 旧陸軍歩兵第44連隊跡地に残る弾薬庫と講堂

旧陸軍歩兵第44連隊跡地は、高知市西部の朝倉にある国立大学法人高知大学朝倉キャンパスの北西にあります。戦前は、朝倉キャンパスの敷地一帯に旧陸軍歩兵第44連隊の兵営が設置され、兵営周辺には関連する陸軍病院や陸軍墓地等の施設が設けられていました。跡地は、兵営の北西部に位置しており、周辺には朝倉神社、朝倉城跡、朝倉古墳などが存在しています。

旧陸軍歩兵第44連隊は、明治29年(1896)12月に愛媛県松山市で設立したのち、翌年7月に当時の朝倉村に転営し、高知県の郷土部隊として正式に発足しました。その後、昭和20年(1945)までの間の度重なる戦争に高知県関係者の多くがこの地から出征しています。

第二次世界大戦が終結した昭和20年(1945)までは旧日本陸軍が使用していましたが、昭和20年(1945)から米軍が高知に進駐し朝倉兵営に入営、翌年5月には英連邦占領軍が進駐して入営し、昭和22年(1947)には進駐軍から日本政府に返還され、高知師範学校と大蔵省印刷局、朝倉新制中学校に払い下げられ、当該跡地は大蔵省(現財務省)の所有となりました。

昭和23年(1948)10月に国立印刷局岡山出張所の管轄する高知倉庫が設置され、旧弾薬庫と旧講堂を紙幣材料の三桎みつまたや楮などの倉庫として使用されてきました。平成23年(2011)3月国立印刷局高知出張所が組織改編に伴い閉鎖されたことから、跡地の活用について検討がなされた結果、県民の皆様が44連隊の歴史や時代背景を理解し、「平和の尊さ」を感じられる場として整備を行うため、令和3年(2021)6月に高知県が土地を取得しています。

### 弾薬庫と講堂

この跡地に遺存する弾薬庫及び講堂は、旧陸軍歩兵第44連隊の兵営が当地に置かれた明治30年代以降に整備された建造物で、令和5年2月27日に国の登録有形文化財として登録されました。

弾薬庫は、煉瓦造平屋建、寄棟造平入、建築面積156㎡、正面に下屋を付します。外壁は約50cm厚で、内部は天井・壁・床を板張りとする三室を並べ、高床で湿気を抑え、出入口のアーチ型両開戸を鉄板で

覆っており、ほぼ完存<sup>※1</sup>する貴重な明治期の弾薬庫として評価されました。

講堂は木造平屋建、寄棟造平入で、建築面積248㎡、外装は下見板張白色塗装、小屋組はキングポストトラス、一間幅の窓を密に配して採光を確保しています。当初は内部を3室に区切り、下士官の学科教育用に建てた質実な陸軍建築であることが特徴です。

弾薬庫及び講堂は、今後の適切な保存と活用を図るため、保存活用計画を策定したうえで、整備を行っていく予定です。

※1 建築当初の図面と考えられている歩兵第四十四連隊(第一号)弾薬庫平面図(高知大学付属図書館蔵)より、前室の間仕切壁の存在や、出入口は両引戸、階段は木製であったことなどが推測されています。



弾薬庫(北東より望む)



講堂(北東より望む)

高知県文化生活スポーツ部歴史文化財課 下村 裕

### 3. 重要文化財（建造物）

## 土佐神社・朝倉神社の保存修理工事

高知市一宮にある土佐神社本殿・弊殿及び拝殿と、高知市朝倉の朝倉神社本殿の保存修理工事が完了しました。いずれも柿葺屋根の葺替・部分修理・塗装修理を、また、耐震性を高める補強工事も合わせて行いました。

#### 土佐神社本殿、弊殿及び拝殿

現本殿、弊殿及び拝殿は、長宗我部元親により元龜2年(1571)頃に再建されました。本殿の構造形式は桁行五間、梁間四間、一重、入母屋造、向拝一間、柿葺で、建物全体に丹塗や胡粉塗、<sup>かえるまた</sup>蟬股や向拝の彫刻等には鮮やかな彩色が施されています。配置は、本殿前面に十字平面の弊殿及び拝殿が接続する入<sup>いり</sup>蜻蛉と呼ばれる形式になっています。

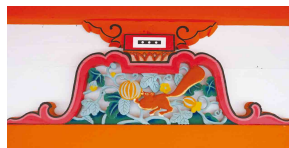
令和元年6月から始まった保存修理事業は令和4年5月に完了しました。

塗装修理は、仕様調査やこれまでの修理の履歴等を調査し、修理方針を決定します。本殿の丹塗りや向拝廻りの彫刻彩色等は、剥離や退色など劣化した部分は手作業で慎重に掻き落として塗り直し、剥離等の程度が小さい部分は、剥落止め・補彩を施し、前回の昭和61年度修理で復原された塗装彩色に復しています。

令和4年6月からは、重要文化財である楼門が事業期間約4年の予定で、半解体修理工事に着手しています。楼門は立地条件から原位置での修理が難しいため、令和5年度には、参道上を約20メートル北に曳家し、素屋根(仮設の覆屋)を建て、調査・解体を進める予定です。



土佐神社本殿(修理前の蟬股彩色)



土佐神社本殿(修理後の蟬股彩色)



土佐神社本殿(修理後)

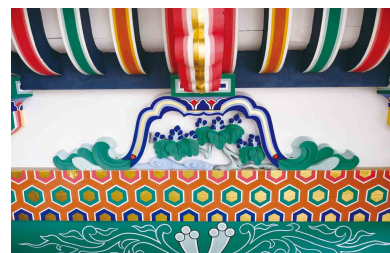
#### 朝倉神社本殿

現本殿は、二代藩主山内忠義により明暦3年(1657)に再建されました。構造形式は、桁行三間、梁間二間、一重、切妻造、向拝一間、唐破風附、柿葺で、建物全体に漆塗や彩色が施されています。

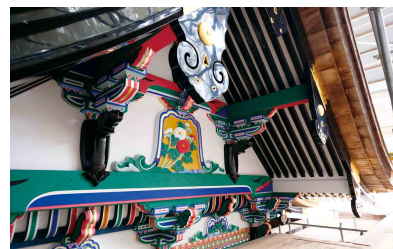
令和元年9月から始まった保存修理事業は、令和5年2月に完了しました。

今回の塗装(彩色)工事においては、幕末から明治期の彩色の状況を目指すことが妥当と判断され、前回平成3年の修理時には痕跡不明として胡粉塗(白色)とされていた部分について、新たに発見された痕跡や、顔料の成分分析、古写真、類例調査等により、文化庁との協議を経て、根拠が明瞭な部分については配色の見直しがされました。

主な変更は、支輪桁と支輪(側面)を「藍」としたことです。この箇所は修理前は胡粉塗でしたが、今回修理時に青色の彩色が発見され、成分分析をしたところ藍と同定されました。今回の藍の塗料は、本藍(徳島県産の<sup>たてあい</sup>蓼藍)から精製した顔料を使用しています。重要文化財建造物の彩色で藍を使用したことが確認されているものは少なく、今回の藍の使用は珍しい事例となります。修理前の本殿の彩色は、全体的に胡粉塗の面積が大きく白色の印象が強かったですが、今回の修理により部分的ではありますが、旧来の姿となっています。



朝倉神社本殿(藍を使用した彩色)



朝倉神社本殿(漆・彩色塗装、金具修理が完了した西妻面)

高知県文化生活スポーツ部歴史文化財課 北山

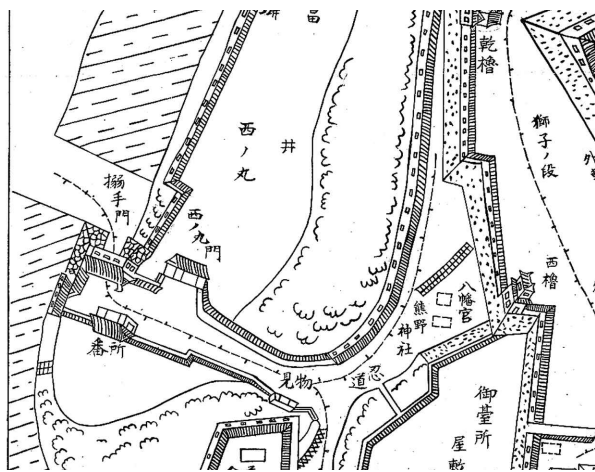
## 4. 高知城西ノ丸西側石垣の復旧工事について

### ①石垣の崩壊から工事着手まで

令和2年6月に高知城西ノ丸の西側で石垣が崩壊しました。県民の皆様には、高知城の弓道場の前、といった方が分かりやすいでしょうか。

この石垣は、江戸時代に描かれた高知城の絵図と見比べると、かつて存在した高知城の堀と西ノ丸の境界付近と考えられます。

現地は交通量の多い市道に面していて、崩壊が拡大すると重大な事故につながるため、応急対策工事を発注し、土のうなどにより崩落部分を押しさえました。その後、石垣の復旧計画を作成し、文化庁の許可を得て復旧工事に着手することとなりました。復旧計画を立てるにあたり、崩壊箇所の周辺を確認したところ、崩壊していない箇所においても石垣の変状が見られ、近い将来に崩壊の恐れがあったため、石垣全体を復旧する計画としました。



明治6年に描かれた高知城の絵図の一部

### ②工事着手から完成まで

令和3年度から復旧工事に着手しました。

復旧する石垣は史跡高知城跡の区域にあるため、元あった石を、元あった同じ場所に積み直すのが基本となります。そのため、石垣を一旦取り壊す前に一つひとつの石に番号を付けたあと、石垣の測量をして積まれている石の配置を図面にしました。これにより図面と同じ場所に石を積みれば、元どおりの石垣に戻すことができます。

一方で、石は元あった場所にただ置けばいいというものではありません。石と石のかみ合わせや隙間

に入れる「間詰め石」の配置を適切に考慮しないと弱い石垣になってしまいます。そこで、石垣の積み直しには、400年前からの技術を継承し、全国各地で城跡や社寺の石垣修復に実績がある石垣の専門業者が加わって施工が行われました。

石垣を積み直したあと、石垣の上部は土の斜面とし、城跡としての違和感がないように芝生を張り、令和4年6月に工事完成となりました。



積み直し状況



完成後の状態

### ③工事中に発見された石垣跡について

復旧工事においては弓道場敷地の水路も改修しました。改修する水路の最下流部分を掘削したところ、人工的に並べられたような石が見つかりました。明治6年に作成された高知城の図と比較したところ、ここは「西ノ丸門」があった場所と考えられたため、西ノ丸門の石垣の一部であると判断し、取り壊さずに元どおりに土砂で埋め戻しました。

また、西ノ丸の北側付近では、階段状に並べられた石が見つかりました。こちらは古い絵図にも描かれておらず、詳細は判明しませんでした。同様に取り壊さずに土砂で埋め戻しました。



発見された石垣跡

高知県文化生活スポーツ部歴史文化財課 堅田智昭

# 5. 国指定重要文化財 「山中家住宅」の保存修理工事について

山中家住宅は、高知県吾川郡いの町の最北、愛媛県境の四国山脈を形成する石鎚山系の東側、また、徳島県へ向かって流れる吉野川の最上流部、標高700mほどの山深い地域の越裏門地区に位置する、茅葺き屋根の民家です。

建築時期は18世紀初頭と県内の民家としては最も古く、間取りや仕上げ、屋根の架け方などが建築時期に対して大変古い形式が見られるなどの特殊性が評価され、昭和47年5月15日付けで国の重要文化財に指定されました。



山中家住宅

## 茅葺き屋根の葺替

生活様式の変化により囲炉裏を使わなくなったことから、煙による防菌・防虫作用が得られなくなり、屋根の耐久力が低下する中、平成3年の葺替から約30年を経て屋根の劣化が進行し、一部雨漏りが発生しており、早急な措置が必要な状態でした。

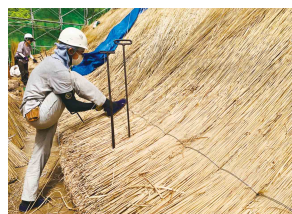
こうしたことから、令和2年12月から令和4年5月にかけて屋根の葺替工事を行いました。

越裏門地区は県内でも有数の降雪地帯となるため、葺替工事にあたっては建物を取り囲むように覆い屋根を建設しました。

その後、雨漏りの応急処置として掛けられてい



茅の除去



葺替作業

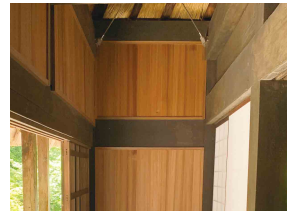
たブルーシートと古い茅を取り除いて、木部の状態の確認と補修を行ったのち、屋根の骨組みに直接茅を置き、竹材で押さえながら踏みしめて葺き上げていきました。

## 耐震補強工事

葺替工事と並行して行われた耐震診断では、立地している地盤の強度こそ優れているものの、土壁を作らず板壁のみである点や、柱を貫通するように差物が多く使われている点などから、大地震時に倒壊の危険性があることが判明したため、耐震補強工事も併せて行うこととなりました。

工事の際には、地震などの災害時に建物内の観覧者の安全を守ること、また、特に応接間として利用が想定される部屋については、内部意匠をできる限り維持することの2点を方針としました。

補強工事の主な手法としましては、建物内部の板壁の片面に構造用合板を設置して、これに化粧板を張って隠す方法と、建物の外壁や天井梁の間に鉄筋ブレースを設置する方法が使われています。



構造用合板補強



鉄筋ブレース補強

## まとめ

山中家住宅は、越裏門地区に住まう人々の生活の歴史が詰まった貴重な文化財です。ここでは、近代化に伴って失われつつある茅葺きや構架などの伝統的な建築技術を垣間見ることができます。

これからも、文化財の保護を通して、過去から現在までの歴史を守るとともに、広く公開することにより、一人一人が文化財に対する理解と認識を深め、このかけがえのない財産を未来へと繋いでいくことが大切と考えています。

いの町教育委員会本川教育事務所 大野

## 6. 北寺所蔵仏像群の免震装置設置事業について

安田町の北寺には、国の重要文化財に指定されている、木造薬師如来坐像、木造釈迦如来立像、木造菩薩形立像1号～5号、木造持国天立像、木造増長天立像の計9体、県指定文化財木造天部立像の2体が安置されております。これら11体の仏像は平安時代に作られ、いずれも作者は不明となっております。北寺の開基は古く、「土佐国編年紀事略」によると大同2年(807)弘法大師が金剛頂寺(室戸西寺)を造営したときに、これを開き本尊に自ら作った薬師如来像を祀ったとされております。

今回、県内では初めて文化財に対し免震装置を設置しました。設置の経緯としては、宝物庫が建築されて50年が経過しており、以前より耐震対策を検討していましたが、東日本大震災、熊本地震と大きな地震がここ10数年間で発生したことから、文化財の保護と減災を目的に地震対策を実施しました。



宝物庫外観

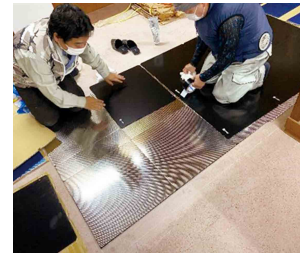
採用した免震装置は、東京国立博物館でも使用されている、アイディールブレン社のミュールレーターと呼ばれる装置です。採用のポイントは、装置自体が2枚のプレートを重ね合わせた非常に簡易なもので、その厚さは約3mmしかなく、大規模な工事をする必要はないことや、景観も損なわず、費用も抑えることができるなどの利点から、今回の採用となりました。

免震装置の設置方法については、仏像を乗せている展示台の下に免震装置を設置する形で、以下のような手順で設置しました。

- ①：仏像を移動し、展示台を1台ずつ移動させ、下地材を敷設する。
- ②：その上にセルシート、滑走プレート、滑り止めの順に設置する。
- ③：②で設置した装置の上に展示台を乗せる。



免震装置



設置状況

免震装置設置後の効果については、震度5以上の大地震を震度4以下に抑えることができ、阪神淡路大震災の約1.1倍の地震には対応できるとのこと。また、維持管理については、装置周辺の清掃と年一回の可動点検を行い、地震発生時には、展示物の状況・免震装置の可動量(定位置からどの程度ズレているか)の記録をし、展示物を定位置に戻します。今後も定期的に巡視を行い、文化財の地震対策につなげていきます。



完成後

安田町教育委員会 小松周平

番号	区分	指定番号(登録番号)	名称	種別	数	所有者等	指定年月日
1	国指定	02027	木造薬師如来座像	重要文化財 彫刻	1体	北寺	M44.8.9
2	国指定	02028	木造釈迦如来立像	重要文化財 彫刻	1体	北寺	M44.8.9
3	国指定	02029	木造菩薩形立像1号～5号	重要文化財 彫刻	5体	北寺	M44.8.9
4	国指定	02030-1	木造持国天立像	重要文化財 彫刻	1体	北寺	M44.8.9
5	国指定	02030-2	木造増長天立像	重要文化財 彫刻	1体	北寺	M44.8.9
6	県指定	203	木造天部立像	有形文化財 彫刻	2体	北寺	H11.4.27

## 7. 佐川町の文化財

# 「斗賀野花取り踊り」(白倉神社花取踊)

「斗賀野花取り踊り」は高岡郡佐川町にある斗賀野地区の氏神様(白倉神社・美都岐神社)で行われる秋の大祭(11月12日)にて、氏子が氏神様に五穀の豊穰を感謝し、平和・安全を祈念して奉納する踊りです。

また、佐川町保護無形民俗文化財「白倉神社花取踊」として指定されています。

### 花取り踊りの由来

花取り踊りの歴史は古く、400年余り昔にさかのぼるといわれています。当時高岡郡下に勢力を誇っていた津野氏の戦での勝利を祝し、神社に奉納した踊りと言われるのが最も有力な起源とされています。

諸説では、戦国の世に小さなハナトリ城があり、その守りは堅く寄手は攻めあぐねていました。考えた寄手は、軍中より美少年を選び抜き、山鳥の尾羽をあしらった華やかな花笠と地につくほど垂らした白たすきの勇壮ないでたちで踊らせ、守備兵の目を引いた隙を突いて城を攻め取ったことが起源だとも、城主の戦勝祝い・敵陣突破・怨霊退治などさまざま言い伝えられています。

広義的には鎌や棒などの持ち物を打ち合わせる棒踊、長刀踊などとも関連して、もともと悪霊退散を意味するものであったらしい。

### 花取り踊りの語源

花取り踊りの語源は、ハナトリ城の名や敵将の鼻を切り取ったなどがありますが、これはハナトリの語呂合わせで、神仏に供える花、櫛、櫛、ツツジ、シャクナゲ等を取る意味であるとされています。花鳥と称されるものは花笠に山鳥の尾羽を飾ったことから称されたと思われま

### 踊りの演目

踊りの演目として「入り刃」・「鎬」・「車」・「西方」・「太刀」・「鎌の手」・「松風」・「引き刃」の8演目があり、「入り刃」・「引き刃」は刀と薙刀、「鎬」・「車」・「西方」は刀、「太刀」・「鎌の手」・「松風」は薙刀で行います。

それぞれ太鼓の音頭に合わせて舞い踊ります。

踊りの足さばきに「ねぶた足」と言う名がつけられており、太刀踊に念仏系の要素がみとれます。



演目「引き刃」での全体像



神様の使いの「鼻高(天狗)」

その昔花取り踊りは数百年継承されてきましたが、戦中戦後の多事多端のうちに途絶えてしまいました。昭和41年に先輩諸兄の心を受け継いだ当時の青少年達の情熱によって復興し、往時の文化を再び現在に伝えています。

斗賀野花取り踊りは、本来青年の踊りと言われていますが、一時は人材不足のため、活動の継続が危ぶまれる時期もありました。長年の踊り子確保の努力が実を結び、地域の理解と協力を得て、近年では小中高生男女の入会も増え現在では若者を中心とした50数名の団体にまで発展し活気づいて参りました。

私達の活動は踊りだけではなく、同地区のイベントである「たらふく秋祭り」への参加や、地元保育園のイベント等にボランティアとして協力することで、年間を通じて地域に貢献しています。このように活動が幅広いために大変な時もありますが、ひとつの目的に向かって行動することで、よりいっそう結束が深まったように思います。

今後も文化の継承と地域の活性化のためにますます頑張って参りますので、応援の程、よろしくお願



「入り刃」での前踊りの刀と薙刀

斗賀野花取踊り保存会 世話人 庄野治



## 8. 八代青年奉納歌舞伎

### —いの町枝川地区に残る伝統文化—

高知自動車道伊野インターチェンジの北側に見える山に八代八幡宮があります。ここでは芝居の好きな氏神様に奉納するため、境内の神楽殿で秋の神祭として毎年11月5日に地元の青年たちが歌舞伎を奉納しています。

奉納歌舞伎の歴史は不明ですが、拝殿や神楽殿が宝暦十一年(1761)に修理されたとする棟札や芝居を支えるため八代八幡宮の氏子たちが慶応元年(1865)に費用を負担していた記録が残っており、江戸時代の中期にはこうした神事が行われていたことが確認できます。

歌舞伎を行う神楽殿の舞台装置は、回り舞台、花道、大夫座などがあり、毎年10月中旬に地元青年たちにより設営され本番を迎えます。奉納歌舞伎が終了すれば、翌日には神楽殿の中に次の年までしまい込まれています。

回り舞台のある神楽殿は、昭和51年(1976)に国指定重要有形民俗文化財「八代の舞台」として指定されています。

#### 伝承される歌舞伎

歌舞伎を奉納する青年たちは氏子をはじめ八代地区に生まれ育ったものを中心に、9月になるとその年の演目を決め練習に入ります。

最初は神社のふもとの公民館で練習を行い、10月中旬には自分たちで設営した舞台の上での本番に向けた練習に入っていく11月5日を迎えることとなります。

歌舞伎を演じる前には、その年の青年団長が舞台を清めるため、拝殿の中にいる氏子を代表する頭屋組(トウヤグミ)の歌うお謡いと併せる形で、白塗りの化粧で烏帽子と鶴の文様の着物を身に着け三番叟を奉納します。



大黒踊り



豊年踊り

その後、黒衣着物をまとった青年5名による黒傘を回す大国踊りが奉納され農村歌舞伎がスタートし

ていきます。

芝居の演目のレパートリーは、定番の白波5人男、忠臣蔵、太功記、義経千本桜、心霊矢口の渡しなど約20種目あり、その中から毎年2本程度を選び上演しています。また、幕間には昔の農村の米作りを再現した豊年踊りなども行われ、神社の境内は笑いが絶えない場面も現れます。



演目「義経千本桜」



演目「寿曾我の対面」

お世話をしている地元青年たちは、子どものころからこのような神事や歌舞伎を見聞きし、大きくなったら自分も役者になることを夢見て育ち、代々伝統が引き継がれてきています。

神祭を行う上で必要となる運営や資金は4組の頭組(トウグミ)と呼ばれるグループの氏子により支えられてきました。しかし、以前は70戸以上あった氏子は現在では57戸にまで減少しており、頭組の代表(頭がしら)を受けてくれる氏子も少なくなっています。

今後、農村歌舞伎を裏で支える氏子制度の見直しなども考えなければならないなど、伝統文化の継承については多くの課題が山積しています。

いの町副町長 水田 正孝

# 9. 東浜土居遺跡

## －弥生時代の集落跡を確認－

東浜土居遺跡は安芸平野の南部、安芸川下流域の右岸に存在する自然堤防上に立地する遺跡です。国土交通省の安芸道路建設事業に伴う高知県からの委託により、令和4年5月から令和5年1月にかけて発掘調査を実施しました。

発掘調査の結果、東側の調査区では幅約10m、深さ約1.5mを測る南北方向の流路跡や溝跡、土器を収めた穴など弥生時代後期末の遺構が確認されました。また、流路跡の東側では多量の土器とともに据え置かれた状態の土器群が確認されていることから、弥生時代の人々がなんらかの意図をもって土器を置いたものと考えられます。



竪穴建物跡

また、西側の調査区では竪穴建物跡と考えられる遺構が3棟確認されました。そのうち1棟は平面形が円形若しくは多角形を呈し、直径約8.6m、深さ約1mを測る大型の竪穴建物跡で埋土からは弥生土器のほか、使い込まれた台石や石包丁が出土していますが、床面では柱穴などは確認されておらず、この遺構の性格については今後検討が必要です。



弥生土器群の掘出し作業

当遺跡の南西約250mには同時期の竪穴建物跡が確認されている河原田遺跡が存在していることから、安芸川右岸の自然堤防上には弥生時代後期末の集落が展開していたと考えられます。これまで、安芸平野を囲む東西の段丘上では清水寺岡遺跡や清近岡遺跡、勇前遺跡など弥生時代中期末の集落跡が確認されていましたが、今回の調査は弥生時代の終わりに集落が安芸平野に進出し、平野部における土地利用が始まったことを示す貴重な成果となりました。近年、瓜尻遺跡やジョウマン遺跡など安芸平野中心部での発掘調査が行われており、今後の発掘調査成果に期待が持たれます。



壺の埋納状態



壺の埋納状態の調査

高知県文化財団埋蔵文化財センター 池澤俊幸

# 10. 長宗我部一族の寺跡発掘調査 —長宗我部氏の菩提寺瑞応寺を求めて—

## 『長宗我部地検帳』と瑞応寺

南国市にある岡豊城跡は戦国大名長宗我部氏の居城として知られています。北麓には長宗我部一族の墓と伝わる五輪塔などの石造物群が所在し、近くには玄陽院・瑞応寺・東谷庵などがあったとされますが、その様相は長らく不明でした。南国市教育委員会では、この長宗我部一族の菩提寺の様相を明らかにしようと岡豊山北麓で発掘調査を実施しました。

『長宗我部地検帳』には「北谷」に瑞応寺があったとされる記述があります。現在北谷という地名は残っていませんが、岡豊山北麓の谷間にある広大な平坦面がいくつも連なる場所が瑞応寺に比定されていました。

## 研究史にみる瑞応寺

長宗我部家臣の子孫である吉田孝世が宝永5年(1708)に記した『土佐物語』によると、瑞応寺は19代長宗我部兼序を祀った千歳山兼序寺を21代元親が再興した寺であるとされています。再興の理由は、父の国親(戒名:瑞応覚世大居士)と母(戒名:祥鳳玄陽大姉)を祀るためで、祥鳳山瑞応寺と称されます。元親が城を高坂に移した際には、瑞応寺も岡豊から猿が馬場洞島(現在の高知市洞ヶ島町)に移したとあります。ちなみに、江戸時代の瑞応寺の住職としては、薫的和尚が有名です。薫的和尚の墓を瑞応寺境内に改葬し、祀られるようになったのが薫的神社です。

## 発掘調査の結果



調査区立地

今回の調査では、岡豊山北麓に複数ある平坦面のうち面積の広い2か所を調査しました。

### (1) 中世の造成土

下段にあたる最も広い平坦面は、中世に造成されていることがわかりました。もともと谷の緩斜面であっ

た場所に山を削った土を盛るという大規模な造成が実施され、広大な平坦面を人工的に作り出しています。造成土は、水はけを良くするために蛇紋岩風化礫を大量に混ぜ込んだ土や、雨が降っても造成土が流れないように土留めの役割を果たす粘土質の土など、用途ごとに使い分けた土を適所に盛っています。さらに、1度造成された後、平坦面を広げるために2度目の造成が成されていることもわかりました。2度目造成後の広さは推定約860㎡、深さは1m35cm以上、層数にして40層以上にも及びます。加えて、1度目の造成土内には土器が全く含まれないのに対し、2度目の造成土には土師質土器や鍛冶関連遺物が含まれることから、ある程度の時期差があると考えられます。

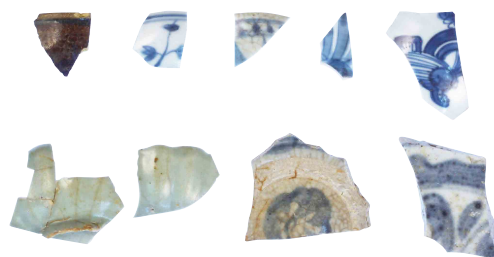


中世の造成土

### (2) 遺物

遺物は中世以降のものが出土しており、上段では屋根に葺かれていた瓦や、茶道具である茶臼・天目茶碗や中国製の青磁・染付の磁器片などが、下段では鞆の羽口・土師質土器の皿などが出土しました。下段からは主に土師質土器しか出土しないのに対し、上段からは茶道具や貿易陶磁器などの奢侈品が出土することから、平坦面ごとに用途が異なっていたと考えられます。

今後は、他の地点の発掘調査を継続して実施し、寺の姿を明らかにしていきたいと考えています。



上段出土の陶磁器

# 11. 神峯寺・神峯神社の文化財調査

高知県では、四国遍路の世界文化遺産への登録を目指した取組の一環として、高知県安芸郡安田町唐浜にある四国霊場第二十七番札所神峯寺と神峯神社について、令和元年度から令和3年度まで文化財調査を実施しました。



神峯神社本殿



神峯寺本堂

## (1) 神峯寺の文化財

神峯寺は高知県内にある16カ寺の札所のうち最も標高が高いところに位置しており、大きく上下二段に構成された境内は下段に鐘楼堂や納経所、高さ約6mの石垣で造成された上段には本堂と聖観音堂が建立されています。

明治時代の神仏分離の影響を受け、この地に移った寺院は明治後期から大正初期にかけて本堂、大師堂(現在の聖観音堂)、昭和初期に仁王門が整備され、寺院には復興の歴史を示す石造物や境内整備に尽力した人々の名前が刻まれた勸進等が残されていることが今回の調査で明らかになっています。また、納経の際に使用した版木等がのこり、札所寺院としての機能を継続したことがわかりました。



寺院の復興に寄与した龍門尼の碑



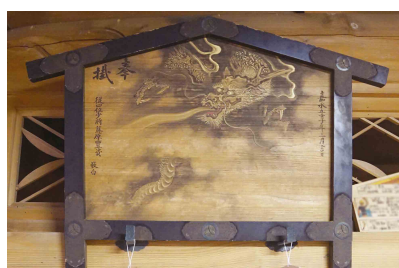
版木十一面観音像(明治25年)

## (2) 神峯神社の文化財

神峯神社は神峯寺の上方約250m登った場所に境内が存在しています。記録によるとその創建は古く、神峯旧記には神武天皇の東征の際にこの地を訪れ「神ノ峯トシテ石ヲ積ミ、神籬ヲタテ祀ラレタルニ

起源ス」とあります。その後大同四年に弘法大師が勅命を奉じて、行基作の十一面観音像を神とともに合わせ祀ったと伝えられています<sup>1)</sup>。

境内には高知県保護有形文化財建造物の神峯神社本殿が所在し、調査によって境内にある石垣や水路遺構、土佐藩主より奉納された絵馬などの詳細が明らかになりました。正面に向かって左側隅角部の石垣には石を積んだ職人と出身地を記したものと考えられる「五台山勇平築」との刻銘が確認されています。



土佐藩主12代山内豊資奉納の絵馬(龍図)



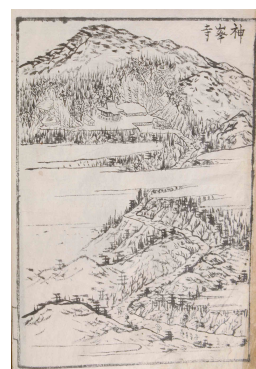
神峯神社石垣西側石垣刻銘の拓本

## (3) 近世神峯の景観と神仏分離

神仏習合の寺社であった江戸時代の様相は寛政12年(1800)の『四国遍禮名所圖會』(以下図会)に描かれています。この図会は各札所の建物の配置や地形、各地の特産物等の情報が描かれた、いわば現代という四国遍路のガイドブックです。

ここに見られる神峯寺には、現在の神峯神社境内にある岩屋神社や本殿背後の岩塊などを見て取ることができます。このことから神峯神社は江戸時代に四国遍路の札所をになった境内空間を現在も継承していることが明らかとなりました。

明治期の神仏分離令により神峯寺は現在地に伽藍を整備することになりましたが、その後の再興の歴史についても今回の調査で検証されています。



『四国遍禮名所圖會』  
寛政12年(1800)の神峯寺

1) 参考文献『新安田文化史』安田町(1975)

## 12. 中土佐町の景観 —海・町・山の生活—

中土佐町は久礼・上ノ加江・矢井賀からなる海沿いの地域と、山間部である大野見地域が平成18年に合併してできた町です。地図上の中土佐町は平成に生まれたものですが、海から町、山までを結ぶ人々の生活の関わりは歴史の中で長く続けられてきました。

高知県史編さん室は令和4年10月30日～11月2日にかけて、民俗編さんに向けて、民俗部会委員の専門家が参加する民俗調査を、中土佐町全域を対象に行いました。

### (1) 久礼の浜・郷・町

久礼地区は海に面し、漁業を営む人々が多く住んできた「浜」と、比較的内陸に位置し、農業を営む人々が多く住んできた「郷」の2つに大きく分かれます。また、それらとは別にあった「町」は、商工業や娯楽の集まる場所でした。

藩政期から営まれてきた長いカツオ漁の歴史を持つ久礼港ですが、一方で明治期以降には大野見や、さらに遠く北幡・高南地域といった山間部から運ばれてきた材木や薪炭の集積と積み出しが盛んになります。地域には今も立ち並ぶ倉庫群と、材木や製板などを船に積み込み、和歌山方面へ運ぶために使われた棧橋の基礎が残されています。



久礼に立ち並ぶ旧炭倉庫群



久礼の砂浜に残る棧橋

かつての往還である現・本町通り商店街の周辺である町は、久礼における商業の中心でした。かつては3つの映画館が建っていたなど、娯楽の集まる場所でもありました。映画館の前では炒った椎の実が売られ、「十戒」や「月光仮面」を観に通ったという子どもの頃の記憶を、郷分に住む方から聞くことができました。

### (2) 大野見と四万十川

海に面した久礼とは異なり、山間の地域である大野見では農耕、林業、狩猟、または四万十川での漁業などといった生業が営まれてきました。

沈下橋から澄んだ流れをのぞき込むと、四万十川

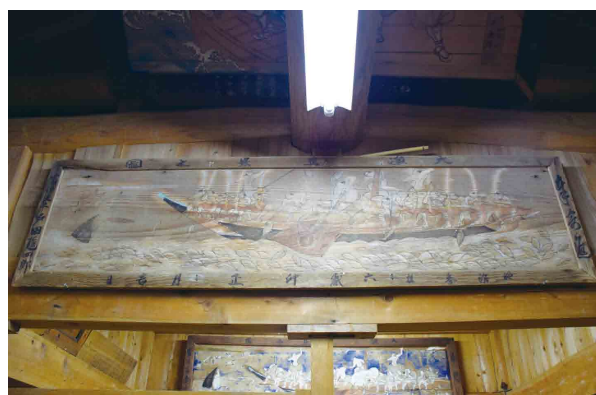
に棲む多種多様な魚を見ることができます。この川は大野見の人々にも多くの恵みをもたらしてきました。現在も、網漁、シャクリ、火振り漁などといった漁法でアユやウナギが漁獲されています。

一方で、久礼で水揚げされた海の魚も大野見では食べられていた、という戦中から戦後すぐの時期の経験談を語る方もいました。久礼から来た行商人が、大野見各地の得意先へ魚を届けていたといいます。

住民の方への聞き取り調査を中心とした今回の民俗調査では、久礼・大野見だけでなく上ノ加江や矢井賀までを含めた地域間の生活の関わり合いを見ることができました。例えば矢井賀には、上ノ加江などの漁師が奉納したブリやカツオ漁の絵馬が残されています。海沿いから山間部までの多様な民俗を一連の流れの中で見ることができる点が、中土佐町地域の特徴の1つと言えるでしょう。



久礼港の東側に位置する鎌田港の風景。  
ここからも薪炭や木材が積み出されていた



矢井賀大神宮に奉納されたカツオ一本釣りの絵馬(明治36年)

高知県文化生活スポーツ部歴史文化財課  
県史編さん室 小林兆太

# 13. コロナ禍における地方寺院の取り組み —四国霊場第三十八番札所 蹉跎山(足摺山) 補陀洛院 金剛福寺—

コロナウィルスの感染拡大は世界を一変しました。金剛福寺も異例の拝観自粛、御納経停止、宿坊を休館し人々が集う祈りの場を余儀なく縮小しました。

## さださん ふだらくいん 蹉跎山(足摺山)補陀洛院 金剛福寺

金剛福寺は、四国最南端足摺岬にあり、太平洋と原生林に囲まれる足摺宇和海国立公園内に境内120,000㎡を誇る南海の古道場です。



足摺宇和海国立公園

日本遺産に認定された四国霊場第38番札所です。

弘仁13年(822)弘法大師空海は、岬突端に広がる大海原に観世音菩薩の理想の聖地・補陀洛の世界を見出し、嵯峨天皇詔勅により本尊三面千手観世音菩薩を彫像、伽藍を建立し「金剛福寺」と名付け開創しました。嵯峨天皇宸筆の勅額「補陀洛東門」は仁王門に掲げられています。歴代天皇の勅願寺となり、武将からも崇拝され、寺宝を数多く有する南海孤岸随一の祈禱寺院。金剛福寺を舞台にした補陀落信仰・観音信仰の物語は「和泉式部の逆修の塔」『とはず語り』『今昔物語』『平家物語』など古くから数多く語り継がれています。本尊三面千手観世音菩薩は暦応5年(1342)前関白太政大臣・藤原朝臣の命によって造られ、不動明王・毘沙門天・二十八部衆・風神・雷神の仏群は中世の代表的な仏像(高知県保護有形文化財)です。

令和4年(2022)金剛福寺開創1200年大祭執行。平成大修理で、本堂は百八体の仏群に囲まれ、大池に



金剛福寺開創1200年大祭



金剛福寺本堂

土佐五色石が映る境内となり、四季折々美しく曼陀羅のようです。

1200年脈々と続く海洋民族の祈りの場、お遍路さんの祈り、心のよりどころを感じる霊地であり、たくさんの観光客が訪れる霊場です。

## ウィズコロナ・アフターコロナにおける取り組み

近年、海外のお遍路さんも増加し、多言語の説明・QRコードの必要性があり、最先端テクノロジーを活用し、文化財の記録・四季折々の自然・歴史・文化を多言語(日本語・英語・中国語・韓国語・スペイン語)で解説。ドローンや360度超高精細(70K)撮影により、VR・E3Dで金剛福寺をデジタルで情報発信することが可能になりました。

SNS上で発信することで、海外からたくさんの巡拝・宿坊の問い合わせを頂いています。そして高知県のクラウドファンディング型ふるさと納税で「高知家」遍路道プロジェクト四国最南端足摺遍路道(金剛福寺への道)」を起ち上げ、日本遺産の遍路文化のモデル地区として、より安全に快適な遍路道を継承できるように取り組んでいます。

コロナ後の参拝を楽しみにしているという声に感謝の気持ちでいっぱいです。コロナ禍によって、物理的な距離は縮められませんが、精神的な距離を縮めることができるのは祈りであると信じて世界に発信していきます。

QRコードを読み取り 四国最南端足摺岬・足摺山金剛福寺を体験・体感してください。合掌



土佐清水市文化財審議委員 金剛福寺 長崎美香

# 14. 佐川町の文化財

## －名教館と牧野富太郎－

### 「文教の町さかわ」

佐川町は高知県中西部に位置し、人口約1万2千人の町です。町内外から「文教の町」と称され、深尾氏の城下町であったこと、そして、文教の伝統が脈々と継承されていることに誇りを持っております。

町内には、江戸時代中期より酒造業を営む有力商家のたたずまいを当時のままに伝える「竹村家住宅」（国指定重要文化財）をはじめ、多数の国・県・町指定文化財があります。また、宮内大臣を務めた田中光顕、佐川の師である伊藤蘭林、近代土木の先駆者広井勇など、多数の偉人を輩出しております。

### めいこうかん 名教館

名教館は、土佐藩筆頭家老であった深尾氏の家塾として、六代領主・茂澄が安永元年(1772)高知より山本仙蔵(日下)を招き、土居屋敷内に創設しました。享和2年(1802)、七代領主・繁寛はこれを拡充して郷校とし、すべての家臣たちに教育の機会を与えました。天保元年(1830)には九代領主・重教は時勢を洞察し、武道場や射場を備えた文武両道の施設へと拡大整備をしました。

「名教館」はこの施設の中の大講義室の名称で、幅五間、奥行十一間あり、玄関は幅二間半、奥行二間、深尾家紋の梅鉢の木彫りを虹梁間に掲げていました。明治2年(1869)版籍奉還により、百年を越す歴史をもつ名教館が幕を閉じ、明治7年(1874)に「佐川小学校」が創設され、名教館の建物はそのまま活用されます。

昭和40年(1965)、佐川小学校の大改築の際、取り壊されそうになったものを町民の尽力により記念館として、校内敷地に移転保存され、昭和59年(1984)9月18日、佐川町保護有形文化財に指定されました。平成26年(2014)、「佐川町歴史的風致維持向上計画」により上町地区に移設され、玄関部分は建設当時のもようを伝えています。現在は、観光スポットとして多くの観光客を迎えています。



大正初年の名教館玄関



現在の名教館玄関

### 富太郎少年

この名教館で学んだ一人として、忘れてはならないのが、日本植物分類学の父と称される「牧野富太郎」博士です。牧野博士は、文久2年(1862)、佐川の造り酒屋「岸屋」の跡取り息子として生まれます。寺小屋で習字や伊藤蘭林の塾で算術・四書などを学び、11歳になると「名教館」へ入学。ここで地理・天文・物理などの先端学問を学びました。博士は自叙伝にて「ここで私ははじめて日進の知識を大分得た」と語っています。

今春、牧野博士をモデルとした連続テレビ小説「らんまん」が放送されます。ドラマでは、名教館も登場するそうです。これを機に、あらためて牧野博士を顕彰し、様々な事業を計画しております。ぜひ、佐川町へお越しください。お待ちしております。



名教館址碑(表題字は牧野博士筆)

佐川町教育委員会 岡田ひろみ

# 掲載文化財位置図



みんなですらう文化財

文化財こうち 第 9 号

令和 5 年 3 月 31 日

編集・発行 高知県文化スポーツ部 歴史文化財課  
〒780-8570 高知県高知市丸ノ内一丁目 2 番 20 号

印刷 池田印刷株式会社